

Lumen Christi

—アレクサンドリアのクレメンスの光の表象—

佐藤吉昭

一序論

キリスト教古代から今日におよぶ伝統典礼の中には光の象徴が数多く伝えられている。とりわけ復活祭徹夜の典礼にはそれが集中して、あたかも光の祭典を思わせるほどである。現在のラテン典礼では、聖土曜日之夜半、堂外での火打石で生み出された新しい火の祝別 (*Benedictio novi ignis*)、復活祭ローソクの祝別 (*Benedictio cerei paschalis*) の式に始まり、信徒一同の聖堂内への荘厳な行列がそれに続く。Lumen Christi (キリストの光)、Deo gratias (神に感謝) が三回、次第に首程を高めて交唱され、その間に今祝別されたばかりの一本のローソクの一点の火が次々に移し点ぜられ、光の輪が広がり、漆黒の堂を今の今まで支配していた暗闇と深い沈黙は、みるみる溶け散って、光の海の中で喜びの合唱が復活の勝利を手中におさめてゆく。その光の渦の真直中で助祭によって声高らかに歌い出されるのが有名な *Exsultet iam angelica turba caelorum, exsultent divina mysteria* (いざ、高らかに喜び歌え、み使いの天の群よ。いざ喜び歌え、神の奥義よ) で始まる復活の賛歌 (*praeconium paschali*) で、これこそは光の賛歌である。「樂しめよ、かくも美しい光に包まれた地も。永遠の王の輝きに照らされて、おほえ知れ、全地から暗闇の消え失

せたことを。あなたもまた喜び給え、かくも輝かしい光に彩られた母なる聖教会よ、なおこのみ堂も民の大いなる声にこだませよ。かくも妙なる光の祭りに集った、いとも愛する兄弟たちよ……それから「実に今日こそは、まことの小羊のはふられる過越しの祭りである」「これこそは実に罪の闇が火の柱によって斥けられた夜である」と旧約の *ἡ πόλις* が語られ、「ああ、量りがたいかな、主の愛の恵みは、それは主が奴隸を救おうと、御子を渡し給うたからである。ああ、アダムが罪を犯したのはまことに必要であった、それは、キリストのご死去によって絶やされたからである。ああ、幸いなる罪である (*O Felix culpa!*)、こういう気高い救い主を得るに値したとは。ああ、実に幸いな夜である……」と美しい修辭を用いて、神の故に罪を贅える。「これこそ、書き記して『夜は昼のように輝くであろう』とある、その夜である」「祝別されたこのローソクがこの夜の闇を追い退けようと、絶えず輝くように。またこれが、かんばしい香りとして主によみされ、その光が天上の星に混じわるように。あけの星がなおその炎を見守り給うように」と復活のキリストが闇に打ち勝つ光として歌いあげられ、祈願されてこの歌は終りに近づく⁽¹⁾。

ところで、ドイツのキリスト教古代学者 *H. J. Dölger* は一連の研究で、ローソクの行列で歌われる *Lumen Christi* の典拠を求めて、呼びかけの典礼定式「喜ばしき光」*gaud. Incho*「夕闇を知らぬ光」*gaud. avertentem* に逢着し、特にアレクサンドリアのクレメンスが用いた「永遠の光」*gaud. aeternum* を示唆する⁽²⁾。彼はさらにクレメンスがこの定式を用いた典拠をヘレニズムの異教世界に広げ、*Nikarchos* の警句や魔術書の呪文に使用されている *yalpe, ienou gaus* (聖なる光よ、讃えられよ) にその根源を見出ししている。その論文で *Dölger* も指摘した通り、クレメンスは著作の中で好んで、光と太陽をイニスロゴスの象徴として使用している。また、たとえばフィロンとヘルメス文書の光の用語の宗教学研究を行った *H. N. Klein* も、クレメンスを光の表象、比喩を多く用いた古代教父として、イレネウ

ス、オリゲネス、アウグステイヌスと並んであげている。⁽³⁾

この小論は、クレメンスが現実にとどの程度と範圍で光の表象を用いているのか、果して光の神学、光の哲学とまで言えるのか、古代教会の思想の流れの中で、広く古代末期、ヘレニズム時代と関連しながら、どのような役割を演じたのかを分析し、あわせて高次の意味でのクレメンスの自然理解との関わり合いを解明するための試論である。

二 用語分析

西歴一五〇年頃多分アテネの異教徒の家庭に生れ、キリスト教に回心して広く東方を旅し、最大の心の師 Pantainos と出会ってアレクサンドリアに住み、二〇〇年頃から師を後継して同地の教理学校の学頭となり、Septimius Severus 帝の迫害(二〇二—二〇三年)下、カッパドキアのカエサレア司教 Alexandros のもとに身を寄せ、二二一—二五一年にそのまま東方で死去したアレクサンドリアのクレメンスの人生には謎が多い。しかし中期プラトン哲学、ストア哲学を主流としたヘレニズム思想、個人としては、神秘思想をも包括したフィロンなどの影響を受けつつ、ヘブライ的キリスト教信仰のギリシア的知解、キリスト教哲学・倫理学への道を開いた彼の業績はその著作によって否定しがたい。⁽⁴⁾

ここで研究の第一手順として、彼の主要三部作「ギリシア人への勧告」(Protreptikos pros Hellenas)、「教育者(Paidagogos)全三卷」⁽⁵⁾「雜録(Stromateis)七卷」および小論「救われる富者は誰であるのか」(Tis ho sozomenos Plousios) 中での光の表象に関連する用語の使用統計を試みると以下のようなになる(ただし、ここでは太陽を除く月、星、ランプなどの光体自体は省略している)。

アレクサンドリアにおける光表象語統計

(使用度数)

著 作 名	Prot	Paid	Qds	Str
GCS テキスト量	84頁	204頁	33頁	593頁
比率(Prot.を1とする)	1	2.4	0.4	7.1

名 詞	意 味	Prot	Paid	Qds	Str	計
1 φῶς	light	27	27	2	87	143
2 ἀυγή	light, rays (pl)	0	5	0	3	8
3 φάος	light	0	0	0	5	5
4 φῶτισμα	illumination	0	5	0	0	5
5 φωτισμός	illumination	1	2	0	2	5
6 ἀκτίς	ray, beam	2	0	0	0	2
7 ἀπαύγασμα	radiance	0	0	0	1	1
8 λαμπηδών	brilliance of light	0	0	0	1	1
9 περιαύγεια	illumination	0	0	0	1	1
10 σέλας	light, blaze	0	0	0	1	1
11 φέγγος	splendour, light	0	1	0	0	1
形 容 詞	意 味	Prot	Paid	Qds	Str	計
1 φωτεινός	shining, brilliant	1	3	2	11	17
2 λαμπρός	bright, radiant	0	1	0	2	3
3 τηλαυγής	far-shining	1	0	0	1	2
4 φωσφόρος	light-bearing	1	0	0	1	2
5 φανός	light, bright	1	0	0	0	1
6 φωταγωγός	giving light	1	0	0	0	1
7 φωτοειδής	radiant, glorious	0	1	0	0	1
副 詞						
φαιδρώς	brightly	1	0	0	0	1

動 詞	意 味	Prot	Paid	Qds	Str	計
1 φωτίζω	illuminate, enlighten	2	12	3	10	27
2 ἐπιλάμπω	shed light, shine upon	4	1	0	5	10
3 ἐκλάμπω	shine (aufleuchten)	3	0	0	5	8
4 καταυγάζω	illuminate, shine brightly	4	2	0	2	8
5 ἀνάπτω	kindle	1	0	0	5	6
6 λάμπω	shine forth	2	0	0	2	4
7 φωταγωγάω	guide by light, illuminate the way	3	1	0	0	4
8 ἀποστίλβω	to be bright from	2	1	0	0	3
9 δαδουχέω	enlighten	3	0	0	0	3
10 ἐκφλέγω	kindle	0	1	0	2	3
11 ἐκφωτίζω	shed light upon	0	0	0	3	3
12 δοξάζω	(glänzend machen)	0	0	0	2	2
13 ζωπυρέω	kindle	0	1	0	1	2
14 ἀπαστρέπτω	flash forth	0	1	0	0	1
15 ἐλλάμπω	illuminate	0	0	0	1	1
16 περιαστρέπτω	illuminate, shine round	0	1	0	0	1
17 περιαυγάζω	illuminate	0	0	0	1	1
18 περιλάμπω	shine round	0	0	0	1	1
19 φωτεμβολέω	throw light upon	0	0	0	1	1

ἡλιος の著作別使用度数

Prot	Paid III	Str	I	II	III	IV	V	VI	VII	計	VIII
11	1		1	0	1	0	5	9	2	18	3

第二に、クレメンスの光表象の分析を進めるにあたり、彼が生存を許された時代と地域、宗教・思想的立場、また以上の総合として出現した著作を形成する具体的要因として、さらに彼の知的能力と、それを支える彼の受けた教育と潜在する教養、また記述の目的と内容を考慮して、幾つかの前提を明らかにしておく必要がある。

キリスト教を含む古典思想家、聖書における光表象、光概念の研究は過去必ずしも少くないが、本論文の主目的、特に分析の前提を明確にするためには、F. N. Klein と Hans Blumenberg⁽⁹⁾の研究、特に前者に示唆されることが多い。Kleinの指摘を要約すると、古代末期までの光用語の使用と表象には同一の基本図式が認められる。しかし使用された用語が同一であっても、それらの含む内容も同一であったとってはならない。たとえば *soorten* (照明する)は、キリスト教の中では、神認識の可能性の設定、さらに術語としては「洗礼」を意味する。初心者を選ばれた神の子たち、信仰者のサークルに受入れ、その救済を保証するにいたる救済過程を指示する上では、この語はキリスト教世界と用語使用を共有していることになる。しかし「比喩による等置」に落込んで、人間が神の地平に高まり、人間の「神化」を包摂することは、キリスト教においては絶対に不可能であった。

いずれにせよ、古代人は日常経験する自然界の現象形態の中でもっとも卓絶したものと考えた光を、宗教的最高存在、神格を示すのにもっともふさわしいものとした。ヘレニズム時代には光表象が広く宗教・思想界の常識概念になっていたが、確たる宗派・学派においては、神と光を完全に等置することはなかった。

しかし、そこに次のような複雑な事態も生じてくる。物質界、感覚界に属する自然光は、それらの特性が稀薄であることによって、神格の象徴^{シンボル}となり、感覚界の内において非感覺的—超越的精神格の本質を再呈示 (*re-präsentieren*) し、具体化する。他方、使用される用語は、その語が本来持つ精神的地平に留り、この再呈示を、そのもつ独自の手段

で転写するにとどまる。つまり、神の光表象には、*Lumen qua Lumen naturalis*ではなく、超越界において神がまさに最高者である特性と、自然界において光が最高、最優美であるという特性の比較が根底にあり、そうした構造と配置の上で、光にまさるシンボルはありえなかったのである。重ねて言えば、言語は本来象徴関係を描写するに過ぎず、また、あくまでも自然的基盤から導入されながら、最終的にはそれを完全に切り捨てることができる自律性を負わされていたのである。特に現世界の不完全性を悪と感じとり、*Dasein*の *Unheilscharakter* が明らかにになったヘンニズム世界では、共通して二元論的契機と緊張感が尖锐化していった。ユダヤ教、キリスト教では、特に創造神の絶対性によって、この対立契機が止揚されなければならない別の契機が存在した。その限りで、光と闇におけるような二元論に組した自然光は神の象徴に働けなくなる。このような困難を打解するために、*Klein*は象徴関係の自然基盤を補填する二つの可能性を意味づけている。第一に表象―類比的比喩(*die anschauungsanaloge Metapher*)の使用。

第二に単純に術語(*terminus technicus*)としての使用。後者の場合、自然的基盤への類比を消去し、概念の抽象的性情を保存させることができる。「光」はその場合、神に対する数ある *Epheton* の一つに過ぎないものとなる。現実には、メタファーと術語の境界は流動的である。さらに *Klein* の二・三の指摘は興味深い。クレメンス自身、中期プラトニズムの影響を比較的強く受けているが、彼の指摘によれば、こうしたプラトニズムは当時の一元論と二元論の中間に位置していて、「地上界のものは天上界の原型の残照である。光についても、地上の光は天上のそれと等しからず、両者の間には大きな *quantitativ* な差異が存在するが、その差は *qualitativ* な差ではない」という見解に立っている。従って、たとえばプラトニズムに立つフィロンの合理主義に偏った解釈、「我々は太陽の光を直視することすら耐えられないのだから、神的なものを直視はできない」も、神的光に対する認識器官は自然光に対する肉体の

目のようなものではなく、認識の媒介を演じる自然光とはまったく無関係な、魂の目であることを見過しているのだ、と批判する。

次に、神の光と地上の自然光は質的差異をもつ限り、思弁的—理論的文書で神的光が扱われる場合には、それは先に述べたように、術語としてか、メタファーとしてである。従って、このような転義的地平上で、神的光の存在のあり方、作用の仕方が記述されざるをえない。しかもそれは近づきがたく、そのために特別にしつらえ、何よりもまず、目ざめさせられ、呼び起された魂の目に現われるものなのである。その場合、用いられる表象言語は、その言語によって表象されるものの陳述を目的とするものではないのだから、大部分、表象—類比にとどまらざるをえない限界があることを指摘する。ただ「出エジプト記」におけるように、神がその光（又は火）の形で具体的にこの地上に出現した場合は、さらに困難な問題を持ち込むことになる。その場合の光は事実、可視的であるから、転義的性格を失い、天上の光の外見的「再自然化」の解釈を我々に迫ってくるからである。

以上、Kleinによって示唆された問題はまさにアレクサンドリアのクレメンスのケースに多く適合し、その光表象研究の第一前提として留保すべき点である。

前提の第二は技術的に彼の著作の構造から生じているものである。著作の内容と進行に従って、クレメンスの該博な古典教養が溢れ出たとき、古典の内容が何であれ、その直接引用および比喩解釈によって光表象が自動的に引き出される。それはまさに、意のおもむくまま、自由に駆使され、彼の觀念連合に従って、第一の引用が第二の引用を導くことにもなる。さらに、当然のことながら、彼の神学的、信仰告白的、論証的主張のために聖書の箇所が引用され、聖書釈義が行われる場合、特にそれが光の表象豊かな旧約中の創世記、出エジプト記、詩篇、イザヤ書など、新約に

おけるヨハネ福音書、第二コリント書簡、エペソ書簡、第一ヨハネ書簡などに関わる場合、クレメンスの光表象が前面に出る可能性がますます増す。もちろん彼の場合には、自身が光表象を使用する目的で聖書の該当箇所を選択する場合の方が多い。また古典と聖書が対比的に、モザイクにはめこまれて、光の表象を織りなしていることもある。

ここで扱う三部作は、著述目的に従って、第一の「勧告」では教養あるギリシア人を対象として、真のロゴスを提示し、彼らの思想を論破しながら、他面、彼らが知らずして所有している真理を称えつつ、その不完全さを教え、救いへの道を説く。「教育者」はその続篇で、クレメンスの勧告に従ってキリスト教に入信した人々に、いかに生活を進めるべきかを教える。ここではロゴスは教育者として示される。そして第三の「雑録」は、彼の希望した組織的意図は達せられていないが、入信者がそれに満足せず、より高次の信仰に立つ完全者、「覚知者」*gnostics* に向う道を説いたもので、認識、義人に向う倫理、愛と秘義など、多面的に画かれている。彼の光表象は、当然そうした作者の意図と主張に従って展開されるのである。

第三に、クレメンスの光表象を用語の意味上から概観し、ガイド・ラインを与えるために、使用頻度が特に高く、その裾野が全ギリシア教父にもおよぶ二つの用語、*phos* と *paraclesis* を G. W. H. Lampe の編集する *A Patristic Greek Lexicon* を骨子に意味体系を展開し、その枝葉に該当するクレメンスの著作の一部を配当すると次のようになる。

1' *phos*

Lumen Christi

- (一) 自然的光 (全著作中に多数点化する)
- (二) 靈的光 (メタファー)
- A 神の光
- 1 光としての神、光の中に存在する神 (Paid I 32. 1, Str I 163. 6) 2 三一論、父の子に対する関係 (Prot 98.4, Str VII 5.5)
- B キリストの光 (Prot 84.6, Paid III Hym V 36)
- C 聖靈の光 (Paid I 28. 2)
- D 天使の光 (なし)
- E 神の国 (なし)
- F 神の出現によって顕にされた神の光
- 燃える茨 (Paid II 75. 1) 火の柱 (Str I 163. 6) 洗礼のキリストに現われた光 (Str VI 140. 3)
- G 神から啓示された光、それによって道徳的、知的、靈的に照明された人間
- 1 ロゴスにより普遍的に拡散された光 (Prot 88. 2) 2 聖書の啓示で伝えられた光、特に福音 (Str V 29. 5)
- 3 キリストの再臨とキリスト教の宣教の拡大 (Str I 13. 11) 「光の子」としてのキリスト者 (Paid II 80. 4) 4 秘蹟で伝えられた光、洗礼 (Prot 120. 1, Paid I 26. 2) 洗礼の際に、聖靈によつてめたふやれた光 (Paid I 28. 2) 特に悪魔の放棄と回心に結びついた洗礼の光 (Paid I 32. 1) 5 罪の潔め、道徳的照明 (Str II 114. 6) 6 知的照明、認識の光 (Paid II. 5, Str II 116. 1, Str V 93. 5) 7 心^ノを照明する真理の源としての光 (Paid I 10. 1, Str V 28. 2)

神の知識に存在し、それによって理解せらるる光 (Prot 77. 3, Prot 115. 4, Str VII 57. 1) 7 靈的照明、完全に向つての道程を歩んで魂に与えられる光 (Paid I 28. 3, II 80. 4, II 99. 6, Str VII 37. 6) 事物の觀照に必要とせらるる光 (Str VII 72. 5) 生命と同置せらるる光—マクネ一章四節 (Prot 114. 2)

靈的照明によって信仰者自身が光となる—マクネ五章八節 (Paid I 28. 2) 愛によって魂に仲介される、秘義の上昇の頂点である神的光の分有 (Str VI 10. 41, VII 55. 6) 来世の至福を所有する神的光 (Prot 8. 3, Str VII 57. 5)

二' *quarēō*

(一) 字義通りの自然的照明

A 照^レル (Paid I 9.3, Str VII 21. 7)

B 明るくする 明^レかなどする (Str VI 145. 6)

(二) 比喩的使用

A 心^{マクネ}の照明 (Paid I 93. 1)

B 靈的照明

1 神の自^レ言^レ (Paid I 57. 2) 2 マーンの内的照明。照明手段として、真理と^レなる (Paid II 80. 4) 知識と^レなる (Paid I 25. 1, Str II 96. 3, V 17. 3) 心の準備をした受洗者の受洗式と^レなる (Paid I 26. 1) 洗礼の内的・靈的働^レきと^レなる (Paid I 27. 3)

三 「勧告における光表象」

先に掲げた光表象の統計表を見れば、「勧告」はその全テキスト量が「教育者」の二・四分の一、「雑録」の七分の一に過ぎない。従って、全般から見て、「勧告」における「光」表象の使用密度が他の二作に較べて非常に高いことがわかる。特にそれは「太陽」の使用度についても言えることである。

以下、順を追って個々の箇所に触れたい。

本文の光表象は先ず二・二―三において、闇に迷う人々を照し出すために光を輝かせる、知恵を伴った真理の降下をうながすことに始まる。ロゴスつまりキリストは、我々を照らす出来事によって人間イエスとなり、我々にとって救世主、教育者である(七・三)。彼に従うなら光にあずかるが従わないなら火(火)がそこにあるのみである(八・三)。ヘレニズム的二元論では火が否定的対極として光に対応することは *Keim* も指摘している。無論火は同時に光と同じ役割をも演じるのであるが、さて、このロゴスは真理の光である(一〇・一)。キリスト者は神の業を求めているのではなく、それらの創造者自身を求めするのである。その彼は太陽に光を与える存在である(六七・二六)。八・四はロゴスを我々の持つべき魂の太陽 *Major suns* にたとえる。この太陽が精神 *noyi* の深みから上昇するとき、魂の目は照らし出される。女預言者 *Sibylla* は靈感を受けて神の認識を太陽、光にたとえ、誤謬の闇に対比させている(七七・三)。父も、父のロゴスも永遠に照らし輝く光である(八〇・二、八一・三)。八四にいたり初めてヨハネ福音書一・九「すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた」に触れて、ロゴスは我々にとって

の光であり、それを通して我々は神を見る *katanythē* のだと語る(八四・六)。八四・二では、主キリストが復活の太陽 *o tēs anastáseos hēlios* であり、彼固有の光によって命を賦与する方である、と明示している。こうしてクレメンスの記述が進むに従い、真理のロゴスは次第に光を増して具現化し、高揚されて、まさに古代の太陽神の強大な地位に取って代るのである。私は、ローマの聖ペテロ大聖堂地下で発見された古代墓所の一つ、*Sacello del Pescaione* の壁面を飾る太陽神キリスト——いなく四頭の馬にひかれた戦車に打ち乗り、頭に *nimbus* (後光)、肩に羽をつけて、天空を駆け廻るヘリオスの姿で具象化された——の有名なモザイクを想い出さずにはおられない。

続く八八・二では、「ロゴスはすべての人間のために光を照らす共同の光 *solis communis* である」として、非キリスト教的異教世界と連帯することの可能な、普遍的性格がロゴスに与えられている。また九二・三一五では、我々自身が闇を避け、光の中を歩む「光の子」*terreni uerbi* であることが要請される。

九八・四にいたって初めて、教義的叙述にめぐり会う。原初的三一論と云うか、父と子の関係について、「神の像 *eikōn* が彼のロゴスである。神のロゴスは精神の眞の息子であり、それは原光 *uors* *apertunou* である。そして眞の人間はロゴスの写像である」と述べている。

一一三から一一五にわたって、クレメンスの光表象はいよいよ内面化し、一抛に大詰に達する。「汝が明らかに神を認識し、また死すべき人間を認識するために」(イリアス五・一一八)、キリストを受入れよ。それによって我々が神を受入れられるように(一一三・二、四)。こうして、すでに F. J. Dölger の研究にふれて紹介したクレメンスの光の賛歌が一一四を飾る。「(一) 真理の忘却は我らから取り除かれよ。無知とさからう闇を、濃い霧のように我らの目から遠ざけたいと我らは願う。眞にまします神を眺め、彼に賞讃のことばをこう叫びたい。『たたえられよ、おお、

光よ』 *vilje ges*、闇に葬られ、死の影に閉じこめられていた我らを太陽の光よりも純粋で、地上の生よりも甘美な一つの光が天から照らした (*et skjeluden*)。 (a) かの光は永遠の命だ。そして彼を分有するものは生きる。しかし闇は光を斥ける。そして畏怖によって次第に消え去りながら、闇は主の日に屈する。すべてはもはや二度とまどろみに傾くことのない光になった。こうして日没は日の出に転じた (*kun'n dvars eis duntolijn nebernen*)。 (b) この光は『新らしき創造』(ガラテア六・一五)を意味する。なぜなら世界万有をいやす『正義の太陽』(*Oratioons vliot* マラキ書四・二)は、『すべての人の上に彼の陽を昇らせる』(マタイ五・四五)父を模倣しながら、人間性を変える。そして人々の上に真理の露をしたらせる。」

このようにして、一一八から一二三にいたる、気品に満ちたフィナーレは、まず Hugo Rahner の研究⁽⁹⁾で有名な「舟のマストの木に自らの身を縛ってセイレーンたちの誘惑に勝ったオデュッセウス」の姿に「十字架についたキリスト」を見出す「聖オデュッセウス」、いわばギリシア古典文学の最高峰と聖書の文学的婚姻でスタートする。クレメンスがこの部分を特に格調高く、力に満ちて記述できた秘密は、一一八・二から三にかけて、ホメロスの「オデュッセイア」一二巻を引用しつつ、突如、文体を単数の「我―汝」人称に転換させていることにあると私は考える。その点で思い出されるのは、Eduard Norden の名著「Agnostos Theos」でなされている *an ei, etv eiiv*、文体で、文体間の相違はあるが、Norden はこうした語法を、ニダヤ・東方的起源をもつ *ein soteriologischer Redetypus* と呼んでいる⁽¹⁰⁾。「死を招く誘惑の歌のかたわらを通り過ぎよ。もしも汝が望みさえすれば、汝は破壊の力を征する勝利者である。そして、木 (*to skou* マスト十字架) に確りと身を縛って、汝はすべての滅びから自由になろう。汝の舵取りは神のロゴスであろう。天上の港の中では、聖霊が汝を導こう……。」「一一八・四)「来れ、汝老いたる人(盲目

のギリシアの予見者 (Teiresias) よ、私のもとに。…見よ、私は汝に、その上に汝を支える木(十字架)を渡す。急げよ Teiresias、信仰に來れ……。」

そして最後に、クレメンス自身、異教の秘儀に詳しく通じ、また関心も寄せていたことから、「秘儀」への入信が勧められている。「おお、何という真に聖なる秘儀よ (ὁ τοῦ εὐαγγελίου ἑσθλὸς μυστήριον) 何と明るきかな光よ。私は入信の光に照明されて、天と神を見ることが出来る。私は秘儀に入信させられて、聖となる。主は聖なる印を明らかにして、入信したものに、照明によって彼の印章を押し(洗礼のこと)、信仰をえたものを永遠に保たせるために、父の保護にゆだねる。これこそが、私の秘儀におけるバックス祭である。」

以上の「勧告」を通じて、光表象はキリスト教と異教ギリシア人、ヘレニズム世界との対話に際しての共通語の役割を演じている (conduit)。それはまた、極めて定式的ではあるが、光と闇の対立パターンを全作品の基礎構造の重要部分にはめこんでいる。さらに、修辭的手段として *metonymy* は「擬神化」と見紛うばかりに高揚されたメタファーとして、いたるところに使用されているが、先の Klein の指摘の範囲内で die anschauungsanaloge Metapher にとどまり、当時のプラトニズムの陥りがちな量的差異にとどまることなく、クレメンスは、ロコス——太陽——光の間の何らかの質的連続性を認めるような表象を何とか切り捨てていくように思われる。

照明と魂の目に与えられ、悟られる内面的光については、その理解と受入れが勧告されているが、クレメンス自身もここでそれを神学的認識論に深化し、ロコス化していかないのは、何と言っても、この Protreptikos の記述目的と読者対象による制約であると考えてよからう。また、この比較的短い作品の中にすでに、「雑録」に先立って秘儀的要素が顔を出し、形式的論理と論証が表面に出がちな「勧告」に、ダイナミックで、粘着度の高い、気品のある性

格を与えている。無論、その際に光表象が大きな役割を演じ、最適の微妙なニュアンスを与えていることは言うまでもない。

四 「教育者」における光表象

「教育者」の光表象は第一巻、九・三の比喩に始まる。救いをもたらすことなく、救済への道を示すことのない善というものは存在しない。「あたかも、光らざる光(φῶς ἢ μὴ φῶς εἶναι)が存在しないように。」

そして、一二・五を経て、ただちに第一巻の光表象の中心点、二五・一以下に到達する。「我々は洗礼による再生の後、ただちに、得ようと努めた完全性を手に入れる。なぜなら、我々は照明されたからである(ἐποτίθημεν)。つまり、それは神を認識すること(ἐπίγνωμα)である。」(二五・一) ここですでに、洗礼—照明—神認識という、洗礼からキリスト教完全者への、教育者ロゴスの導きによる道程の基本線が呈示されている。「洗礼によって我々は照明され、照明によって神の子供にされ、(βαπτισθέντες φωτισθέντες υἱοτοκοιῦμεθα) 子供になることで完成され、完成されることで我々は不死とされる。」(二六・一) さて、洗礼をめぐる以上の経過は色々に言われる。いわく、恩恵(χάρισμα)、照明(φωτισμα)、完成(τέλειον)、沐浴(λουτρον)。それによって罪が洗われる限り、沐浴。それにより過ちの罰が除かれる限り、恩恵。それによって、あの救済の聖なる光(τὸ ἀπὸν ἐκείνου φῶς τὸ σωτηρίου ἐποτίθημεν)が見られる限り、つまり、それによって我々が神を明らかに見る限り、照明である。また、何一つ欠けることがないから、我々は完全性と呼ぶ(二六・二)。そして、二七・三では、「再生するや否や、その人は照明され、

ただちに闇から解放され、その瞬間、光に受け入れられたのである。」と、洗礼の内的、靈的効果が確認される。

次いで、受洗者のその後の、復活にいたるまでの経路が光表象を用いて語られる。「洗礼を受けたものは、暗く、神の靈に抗して道筋に立つ罪を、霧を遠ざけるように、我々から拭い去り、靈の目を自由に見開き、何によっても妨げられず、明るく輝き (*garuebn*)、天からならに聖靈が我々に注がれるときに、それによって神を見るのである。」(二八・一)「それによって生じた永遠の輝きとの混合 (*kapajna adyrs azolou*) が永遠の光を眺めること (*to didou gar iselou*) を可能にする。なぜなら、同じものは同じものとなじみ合うからである (*etel to viorou te oiaiq pilou. cf. Homeros, Od. 17. 218; Platon, Gorgias p. 510B etc.*)。そして聖なるものは、そこから聖なるものが生来するものと親しむのである。そして、まさにそれが本来の光の意味するところである。『あなたがたは、以前は暗闇だったが、今は主において光となった』(エペソ五・八) それだから、と私は思うが、人間は古人たちによって *gar* と呼ばれた (*gar* 古語「人」*gar* 「光」)。(二八・二)「しかし、言われているように、彼はまだ完全な賜物を受取ってはいなかった。私はそれを認めよう。だが彼は光の中にある。そして、闇が彼をもはや捕えることはない。そして、光と闇の間の間には何物も存在しない。信ずる人々の復活のうちに、完成がある。」(同三)

以上のような論議を経て、彼は信仰論に筆を進める。「永遠の命を、信仰を通して、将来のものとして、すでに今、前もって得た後で、我々は復活の後、それを現実として受取る。『汝の信仰によってそれが起る』(マタイ九・二九)。信仰あるところに約束がある。約束の完成は休息 *anapsuchis* である。それに次いで、照明における覚知 (認識) がある (*ty rvdars au te qoriatour*)。しかし、覚知の終局は休息であり、それが最後の目標として認識される。」(二九・三)「経験によって未經験が除かれ、援助によって危急が除かれるように、必然的に、照明によって闇が消滅にもた

らされなければならぬ ($\tau\theta$ *qwtaiarq* *éstaqanísceðai to skótos*)。闇は無知に生じ、その結果、我々が真理に盲目であるのだから、罪に陥入る。認識とはつまり照明なのであり (*qwtaiarq* *ápa η ywáois éortu*)。それが無知を除き、そして視力を授けるのである」(同四)

このように、無知—闇—罪の可能性—真理に盲目、の觀念連合がネガティブに形成され、それに対決して、肯定の觀念連合、認識—照明—視力の連合が教えられている。「洗礼による罪の潔めにより、我々は悪から脱れる。我々が洗礼以前とはもはや同一でなくなることが、照明(洗礼)の唯一の恩恵である。(*úda xáois áurq̄n tou qwtaiarq*)。だが、認識は同時に照明によって生じ、我々の精神を照らす ($\tau\theta$ *qwtaiarq* *repluatpárroua toú yoyu*) ので、我々無知なるものは同時に、弟子たちと呼ばれる。その教育は、以前のある時期に我々に与えられたが、それがどの瞬間に与えられた、とすることはできない。」(三〇・一)「なぜなら、教育は信仰に導き、信仰は同時に、洗礼において、聖霊によって働かされるものだからである。」(同二)

以上のように、「教育者」第一巻のこの場所で、洗礼論、信仰論がかなり系統だって記述されている。 *qois*、*qwtaiarq*、*qwtíceu* などの光用語は、 $\tau\theta$ で洗礼を示す *terminus technicus* として使用されながらも、なお、表象・類比的比喩の役割をも同時に果している。同じ記述は三二・一にも見られる。

しばらく、単に自然的事実の比喩として同じ光用語が用いられたあと(四〇・一、五一・三)、五七・二は創世記三二・三〇に触れ、「神の顔はロコスであり、その方によって、神は見られ(*qwtíceu*)、認識される。」と述べられる。クレメンヌはここで、イスラエルの語義は「神を見る」であるとして、アレクサンドリアの先輩フィロン (*De Abrahamo* 57) の解釈に服している。同じく旧約に触れ、主はエレミアを通して、誤ったものたちに真理の光を照らすをせ

た、と九三・一で語っている。

「教育者」第二巻においては、クレメンスの光表象は、さして重要な記事を含んでいない。一八・一、二九・三、四〇・三、八〇・一、同三、同四、九七・一、一二一・三など、いずれも道徳的教訓として比喩的に使用されているにすぎない。同様のパターンで、九九は情欲、離婚に触れて語られている。感性的光 (*το αισθητό φῶς*) から隠れおわすことは人にできよう。だが、霊の光 (*το θεϊκόν φῶς*) から隠れおわすことは不可能である (九九・五)。我々は闇を覆いにして、自分の隠れ蓑に逃げこもうとは思わない。光はどっちみち、我々自身の内に住んでいるからである。「闇は光に勝つことはできない」(ヨハネ一・五) とある。むしろ夜は、謹み深い思慮によって照らし出される (*κατακαλύπτει*)。徳のある男たちの思慮を、聖書は「決して消えることのない灯」(知恵書七・一〇)と呼んでいる (九九・六) と述べている。第三巻は省略する。

「教育者」においてのクレメンスの光表象は、以上考察してきたように、キリスト教を受け入れた入信者に与えられた洗礼、それに伴う照明、そこから始まる覚知と完全に向っての道程に集中し、それを頂点としている、と言ってもよからう。

五 「雑録」における光表象

「雑録」の光表象は第一巻一〇・一に始まる。「悪しき教育と教えを通して、その『魂の目』(*το εὖς ψυχῆς οὐρα*) が魂本来の光 (*το οὐκείον φῶς*) に対して鈍っている、そういった人は、聖書の中の書かれざるもの (*τα ἀγράφον*) が啓

示している、その真理のもとに行きなさい。」次いで一三・一「主は『それを理解する状態にある』(マタイ一九・一以下)人々が、神の秘儀と、あの聖なる光に加わることを許される。」さらに一六・三は善行について、「時間と努力を経て、善き助け手が見出されるときに、真理は輝き出るものである。なぜなら、大部分の善行は、人間を通して、しかも神によって提供されるものだからである。」

ところで、「雑録」は本来、キリスト教完全者、覚知者^{ゲノシス派}への道を理論的に、また実践的に説こうとするものであり、その前提として、クレメンスは、当時としては大胆なことであったが、教会内の信徒大衆の意に抗して、キリスト教信仰に対する、ギリシア哲学の効用を主張した。それは信仰内容のより深い認識を意味する。だが、同時にそれは、クレメンス自身、異端的グノーシス派ときっぱり一線を画しながらも、一種の二重信仰論を生み出している。⁽¹¹⁾しかし、洗礼によって誕生した単純な信仰者(δουλοί)と、知性において愚かしき軽薄な人々の前にかくされ、守られている、より高く深い真理、気高い信仰の真理を霊において悟った、完全な靈的信仰者 *νεομυστες* との優劣的区分を決してグノーシス派のように認めていない。救済において、両者まったく平等であることをクレメンスは認めながら、より困難で、より努力のいる、長い救済への別路を歩む、キリスト教覚知者の姿が熱烈に説かれるのである。そのために、「雑録」では特に、内面の真理の光を無用なものに晒すまいとする、神秘主義的、秘儀的装いが見られるが、その基調は、本篇における光表象の現われ方と無縁ではない。

第一巻の光表象は次のように続いている。「真の光についての、真実純粹で透明な教えを、豚のような、『無学な』聴衆の前にさらけ出すことは困難である。」ところで、真理は元来唯一であるのに、ギリシア哲学、異教哲学によってそれは切り裂かれてきている。「だが、光の日の出によって、すべてが照し出されるのだ、と私は思う」(五七・一)

と、新しい教えの到来が表現されている。そして、プロメテウスの火のように、ギリシア人によって盗まれた哲学の中には小さな火花が存在したが、「それはやがて、正しく点じられれば、光となるに適した火花だった。知恵の道標、神をめぐる^{（εὐρησία）}の動き^{（εὐρησία）}であった。」（八七・一）ここでは、ギリシア人たちがモーセの教えを剽窃^{（εὐρησία）}したのがギリシア哲学である、という、教父たちの伝統にある剽窃説を、プロメテウス―火―光の觀念連合で、光表象として示した例である。第一巻最後の光表象は、箴言六・二三からの引用である。「よき命令は燭台の光であり、捷は道程にある光である。なぜなら、教育が生涯の道を示すからである。」（一八一・三）

第二巻から第四巻までを省略し、第五巻以後の光表象を考察しよう。第五巻の光表象は一五に始まる。ここでは教育論が展開され、プラトンの作品が種々引用されたあと、「ギリシア以外の哲学者たちもまた、教育と照明を再生と呼んでいる^{（ἀναγεννηθῆναι λέγουσι）}。」（同三）^{（同三）}「アルキビアデス」一〇九での正・不正についてのアルキビアデスへのソクラテスの質問のあり方をさして、「こうしたことは、あの無知の深い闇の中で、夜、火をともした賢い乙女たちのランプである。この無知を聖書は『夜』と呼んでいる。乙女たちのような純粹で賢い魂は、自らが無知の中に存在していることを知っていたので、光をともし、その精神^{（πνεῦμα）}を自覚めさせ、闇を明るくし、無知を斥け、真理を求め、教師^{（διδάσκων）}の出現を待ち望んでいる。」と述べる。クレメンスはこのように、ギリシア古典^{（κλασσικὰ）}ここではプラトンと聖書^{（βίβλος）}ここではマタイ二五章を直接連結して、独得の知解の場を形成する方法を好む。同様な組合せで、二九・六ではギリシア哲学が次のように関係づけられている。「だが、主のことばが語られた後、かの聖なる光は、まがうことなく光り輝いた。それからというもの、夜になると、あの盗まれた光が家の中で非常に役立つ。だが日中には火が照り輝く^{（καταυράσκει）}。そして夜のすべてはかくも強力な精神的^{（πνευματικὴ）}光^{（ὁ θεὸς ἡντοῦ）}の

太陽によって照らし出される。」六四・四では、第二コリント四章四、六に関連させて、「だから『照明』*paratibros*は隠されたものを現わした教育の *metreia* と呼ばれる。ここでは教師独りが木箱の蓋を開いたからである。」

六七・四では覚知者の性格に触れて、彼の魂はこの世から自由になり、むなしく偽りの思いから生じる肉体の虚無、すべての情欲から解放され、肉の情欲を捨てて、光によって聖とされなければならない、と言う。Otto Stählinはこの箇所をフィロンの *De sacrificiis Abelis et Caini* 84 と関連させている。七七・一では「教える者、学ぶ者が生活を共にしながら、問題を度重ねて討議するうちに、突如として、飛び火によって点じられた火のように、魂の中に光が生じる。」という、プラトンの第七書簡三四一C・D が引用される。出エジプト記二〇・二二にアレゴリア解釈を加える七八・三では、この聖句が、神を見ることが不可能であることを理解できる人々に示されたもので、真理の輝きに対して、「闇」として、大衆の不信仰と無知が道の途中にあることを意味する、と解している。九三・五以下ではフィロンの *De officio mundi* に関連して、天地の創造、精神の光 *phos noyebu* の創造に触れる。また、一〇〇・四では、聖書の中で神と彼のロゴスが、火と光として象徴されていることを説く。その他、光表象を含むギリシア古典作家の引用が巻末に多い。

第六巻は覚知者の生活指針、その倫理を主題にするが、まず導入として、本書の表題、*Stromateis* の意味と執筆の方針について自ら触れ、二・四でこう記している。「我々の認識、精神的花園 (*o paradisos o neumatikos*) は我々の救世主自身である。我々はその中に移植された。土壌の変化は豊かな実りに役立つ。その中に我々が移植された、その主は光であり、真の認識である。」次いで三二・四はシナイ山上の神の出現にふれて、これは世界を貫き、「近づきがたい光」を告知する神の力が具象化されたものである、と言う。また、六六・一以下では、哲学の性格を巧み

な表象で説く。哲学が悪霊から生れたと主張する人は、第二コリント一・四の「光の天使」の姿をとった悪魔カサフエを考えればよい。哲学がいわばこの「光の天使」の姿で預言するとき、それは真なることを述べる。哲学が天使と光にふさわしく預言するとき、それは有用なことを述べるであらう。

七五・二以下では覚知者の性格が光の表象を用いて明らかにされる。「不滅の光(第一テモテ六・一六)に達した者が再びこの世の財にもどりとくという動機は、理性的に存在し得ない。」覚知者は普遍と個の区別の力を持つ。聖書の考察に際しても、ことばと内容の区別が、魂 *syna* の中に明るい光を生ぜしめる。それは、人々が聞く折に、多くを意味する個々の表現に注意すると同時に、多くの表現がただ一つの同一の意味を持つ場合にも注意しなければならぬからである。そこから正しく答える能力が育ってくるのである(八二・三)。同種の表現は八三・二に見られる。さらに、我々の覚知者は正義の中にあらわにされ、今からは、彼の顔はモーセのように輝く(*deglafayebor* 一〇三・五)。かくて、義人、覚知者の魂の上には、神の保護と預言と支配の結果、神的な善の力が置かれ、太陽の熱によるように、一種の霊の輝きが刻まれる(*apaydajia vobdu*)。それは、変ることなく、神を敬い、神の靈にとらえられた愛によって、魂と結合した光である(一〇四・一)。己の情欲を圧え(*metponabhyas*)、それからの開放に努めた者、グノーシスの完全性のよき完遂へと(*eie eunoiu yvorteny telesthyros*) 歩を進めた者は、すでにこの地上にありながら、「天使的」(*odryelos* ルカ二〇・三六)である。彼の善行に対応して、彼はすでに光に満ちあられ(*qarends de hdy*)、また太陽のように輝き出ている(*os o thos kaitou*)。そして、彼の神への愛による正しい認識にあって、聖なる住居に上るよう努めるのである。選ばれたからではなく、そうならうと努めてなった使徒たちのように(一〇五・一)。信仰をとらえたものにとり、認識を獲得することは当然である。……彼がすでに真理に参与していると言

おうとしているのではない。まさにそれを始めたところである。また、それを将来に予定する、と言うことも似つかわしくない。今すぐに王のように気高く、照り輝かされ、グノーシス的であることが似つかわしいのである(一五二・一一二)。その他、一一六・一、一三三・三、一三八・一一二、一四〇・三、一四五・六では、いづれも聖書のアレゴリア的解釈が行われ、光の表象がそれぞれ用いられている。最後に、ギリシア一般文体と預言の形式の差異を語る一二九・四を引用すると、「預言は、芸術的技法のための美化の努力はしない。ただ真理を保持するだけである。それは通人のためのものではない。密かなもので、認識(覚知)を伝授されたものたち、つまり、真理をそれへの愛から求める人たちに光を昇らせるためである。」

第七巻の光表象は、数量的に多くはない。信仰と覚知によって高められた覚知者の状況について、まず、五・五はこう表現している。「なぜなら、神の子はいつでも、彼の高い物見台を離れることがない。神の子は離されることも、引き裂かれることもない。場所を移動することもない。いつでも、どこにでもおり、決して限定されない。神の子は完全な精神(δύσ νοῦς)、父からの完全な光(δύσ οὐρ πατρῶν)、完全な目である。彼はすべてを見、すべてを聞く。すべてを知り、力をもつてすべての力を探知する。」続いて、「これらの徳ある人々は、神に『氣に入られた犠牲』(フィリップ四・一八)である。……『神のための完全な犠牲』そして聖性に高められたすべての人は、(神との)分ちえない一致へと照明されている(ἐκφορτέομένης εἰς ἐνωσιν ἀδελφότητος)」(一四・一)。

ロゴスの力については次のように表象されている。太陽がただ単に天と全世界を照らし、その光を大地と海の上に注ぐのみでなく、その光を窓と小さなすき間を通して、家のもっとも奥にある部屋まで送るように、神のロゴスもまた、いたるところ拡散され、我々の人生のもっとも小さなことどもをも眺める(二一・七)。神の力はまるで光のよう

に、一瞬に全魂を見通す(三七・四、同六)。

五五では、認識と、教育で伝えられた知恵の間には区別がある。認識があれば知恵がある。しかし、逆は真でない。認識の根底は、人が神を疑わず、信ずることの中に生じる。キリストは根底であると共に、上部構造でもある。なぜなら、彼を通して始めと終りが存在するからである、と述べたあと、「この始めと終りを私は信仰と愛と考えるが、両者の間の明白な境界が何であるかは教えられない。だが、認識は、神の恩恵によって、伝統の基礎の上に与えられる。そして、その教えに価すると判明する人々に、担保を信頼するように与えられる。認識から、愛の気高い価値が常に明るい光の中に輝き出る。」(同六) また、五七・五は繰返して、覚知者の像を示している。「多分、進歩した者は、この世で『天使に似たもの』の状況を先取りし、それにふさわしいものになる。とにかく、彼が、肉体をもつて達しうる究極、最高の段階に上ったとき、彼はそれに適したように、よりよきものに変じ、聖なる七の教によって、父の家へと、主の現実の住居へと、達するように努力する。そこでは、彼はいわば、確りと立ち、永遠にとどまり、あらゆる面で完全な、不変の光として存在するであろう。』」というのは、彼覚知者は、熱さに加わることで熱くなり、火に加わることで光となろうとするのではなく、彼自身が全き光なのである。」

六　む　す　び

この小論文は、アレクサンドリアのクレメンスの光の表象について、たとえばフィロン、オリゲネス、カッパドキアの教父たち、偽ディオニシオス、西方のアウトグスティヌスなど、光表象を駆使した古代著作家、教父、三一論形成

者たちとの関連や交流において、それを考察するのではなく、一度クレメンスの著作自身に確りと根を張って分析作業を進めた上で、その評価を改めて与えたいと志したものである。

試論として考えた本論文では、光表象研究のための困難な前提の分析と方法論を固めることに力を注ぎ、結果的には、使用箇所の見解、用語の統計、それらが実際に使用されているテキスト部分の蒐集に終り、せめて、この著者の各篇における執筆意図と具体的テーマとの、多くはモザイクのようにその中に使用されている光表象の内容的関わり合いを推察できたにとどまった。敢えて言えば、クレメンス独自の光の観念連合、光の表象を記述する彼の方程式が少しく明らかになったことがつけ加えられるであろう。本来の課題をさらに推進するためには、著作全域と、各個別箇所でのその用法を詳細に比較、分析すること、また、改めて、先にあげた、光表象に特色をもつ教父たち、ヘレニズム著作家たちとの相互比較が行われなければならない。本論文から抽出できた若干の蓋然的事実を列挙してみると、次のようになる。

一、光をめぐっての、クレメンスの神秘的雰囲気にもかかわらず、使用されている光用語、表象の量は、他に較べて多いとは言えず、モノトーンであるとも言えるのではなからうか。

一、クレメンスの思想と著作においては、フィロンの影響が従来、かなり過大に考えられて来た。しかし、光表象に關しては、特に使用される光用語のちがいが、頻度のちがいが、表象のちがいがなど、両者の関わりはむしろ少ないのではないであらうか。⁽¹²⁾

一、クレメンスはもとと体系家ではないが、彼の光表象の教義面への使用、特に三一論への展開などが稀薄で、必ずしも有効でもないのではなからうか。

一、なりとて、これだけの集中的素材を用いながら、ギリシア哲学との調和をはかる、一種のキリスト教ヒューマニズムの展開に終り、いわゆる光の形而上学の設立、またはその先駆者の役を果たすにはいたたかなかったのではなからうか。

一、以上から考察して、クレメンスの光表象は、その量の大ききにかかわらず、また、ユダヤ的思考背景をもつ、キリスト教独自の立場からの使用にもかかわらず、当時のヘレニズム時代に広く通用した表象・類比的比喩 *die anschauungsanaloge Metapher* から、大して大きく超えてはいないのではなからうか。

これらの諸点を早急に肯定することはできない。ここではまず、基礎素材が提示されたこととまわっている。

註

本論文で使用されたキリスト教の語の

Clemens Alexandrinus hrg. von Otto Stählin (Die griechischen christlichen Schriftsteller der ersten drei Jahrhunderte) Bd. 1 Leipzig 1905, Bd. 2 neu herausg. von L. Früchtel Berlin 1960³ Bd. 3 Berlin 1970³

註一 訳文は光明社版「聖書辞典」を採った。原キリスト教辞典は、大石の「聖書辞典」を採った。

2 Dölger, F. J.: *KAIPE IEPON 002* als antike Lichtbegehung bei Nikarchos und Jesus als Heiliges Licht bei Klemens von Alexandrien (Antike und Christentum Lumen Christi

Band 6 Münster 1970² S. 147-151)

Dölger, F. J.: *LUMEN CHRISTI*. Untersuchungen zum abendlichen Licht-Segen in Antike und Christentum. Die Deo gratias-Lampen von Selinunt in Sizilien und Cunicul in Numidien (Antike und Christentum Band 5 Münster 1970² S. 1-43)

3 Klein, F.-N.: Die Lichtterminologie bei Philon von Alexandrien und in den hermetischen Schriften, Leiden 1962. S. 193.

4 Cf. Sato, Yoshiaki: Die Biene—eine Sachanalyse zum Naturverständnis des Klemens von Alexandrien (Mem-

ois of Kyoto Sangyo University 1970)

9 Stromateis は構成上「全八巻よりなる」。しかし第八巻はクレメンスの他の著作のためのスケッチ、断片で、恐らく死後集めて雑録に付加されたものであろう。そのため、本論文では使用するのを避けた。 Excerpta ex Theodoro, Eclogae propheticae の二篇⁹は、ヘカトニメントヤヌス派クローシスの書から、クレメンスが研究のために集めた資料集で、彼自身のことばとの区別が不明で、そのため、本論文では使用を避けた。

9 Blumenberg, Hans: Licht als Metapher der Wahrheit — Im Vorfeld der Philosophischen Begriffsbildung, 1957.

邦訳「光の形而上学」真理のメタファーとしての光 (佐松敬三監)

7 Klein, F-N, op. cit. S. 204-215.

8 Cf. A Patristic Greek Lexicon ed. by G.W.H. Lampe, col. *phōs* p. 1504-1507, col. *phōs* *φω* p. 1508-1509.

9 Rahner, Hugo: Griechische Mythen in christlicher Deutung, Zürich 1957. „Der Mastbaum des Kreuzes” S. 467ff.

10 Norden, Eduard: Agnostos Theos. Darmstadt 1956⁴, S. 177-201.

11 C. f. Wolfson, H. A.: The Philosophy of the Church

Fathers, p. 120-127. Clement of Alexandria.

12 クレメンスのクレメンテウスの直接「間接の影響をこうして」は、Wolfson の特に主張するところであるが、¹⁰ *phōs* の新論論文としては J. C. M. Van Winden の “Quotations From Philo in Clement of Alexandria’s Protrepticus” (Vigiliae Christianae 32 p. 208-213) がある。しかし「たゞ¹¹ *phōs* は、クレメンスは全著作でただ一度「教育者」二卷一三一・三で使用するのみであるが、クレメンテウスの重要光用語であるが、クレメンスはただ一度「雑録」六卷一〇四・一で使用するのみである。